

---

# 青い空

オレ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

青い空

### 【Nコード】

N2919BA

### 【作者名】

オレ

### 【あらすじ】

後々語られていくが

非常に主人公が大変な物語

## 大変な日々（前書き）

個人的に

乗せたかったので乗せました。

## 大変な日々

俺の名前は鉄原龍二。

年は16歳。

希望が丘高校に通っている。

いたって普通の高校生なのだが

両親がいない兄弟もいない。

いたといえはいたのだが死んでしまった。

正確に言えば殺されたのだ。

誰かに。

俺はそれを探すためにこの学校に来ている。

この学校は何か隠してる。

日本中を巻き込むようなことを。

なぜわかるかは放課後にでも話すとしよう。

今は午前8半。

学校に着いたところだ。

「おはよー」

龍「おはよー」

クラスメイトと軽く挨拶をする。

このクラスには明るい人が多い。

俺がクラスになじんだというか周りが早く受け入れてくれたという  
ほうが正確だ。

このクラスでよかったと思いつながら自分の席に着く。

一息つきながら今日の予定を頭の中で確認していく。

「今日はあれがあるな」  
とつぶやく。

今日の予定を確認し終わってボーっとしていると

後ろから声をかけられる。

？「おはよー」

龍「うん？」

後ろからこえをかけたのは

若井香梨

しっかりしててちょっとドジで見ているとたのしい。

みんなに好かれている。

その後ろから来たのは

真田真由美。

こっちはクラスメイトから聞いたがツンデレらしい。

少し話したことがあるが普通だったけどよくわからない。

もっと仲良くしないとみれないのか。

真田「おはよ」

龍「うつつ」

軽い挨拶。

そしてチャイムが鳴る。  
ホームルームが始まる。

？「席につけーっと」

先生が入ってくる。

彼の名前は小林 和義  
みんなコバカズと呼んでいる。  
非常に人情深くていい先生だ。

ホームルームは特に目立ったことはなかった。  
動画というカットの部分だ。

そして授業が始まり終わっていく。  
その繰り返し。

正直授業は聞いてない。

ノートを書いているだけだ。  
俺がこの学校にきている理由は

授業を受けに来ているわけではないからな。

ぼーっとしている間に授業をも終わり、  
昼休みだ。だが学校のことは追々紹介したいのでカット。  
そして放課後。

俺はけいおん部に所属している。

これは意味があつて本当は野球をしたことがあつて  
野球部に入りたかつた。

でも部はサボりたくないの  
時々かおを出している。

本当ならば今日もけいおん部にいくのだが  
用事がある。いけないのだ。

最初のほうに言った理由を話したいと思う。  
なぜこの学校何か隠しているかという  
実はこの学校はある団体を作っている。

町に人も生徒すら知らない団体。  
それに俺は入っている。

名前は「特殊任務隊」なんて花がない名前だろう。

でも国が決めた規定で能力を測りランクをつけるといって結構真面目な団体だ。

俺はこの団体に所属している。

この団体のランクを上からいうと、A B C D Eの順だ。

でも俺はこのランクのいずれにも所属していない。  
なぜか。

それはAの上のランクがあるからだ。

Aの上限は100メートル11秒、砲丸投げ40メートルなど超人並みのやつがそろうとこだ。  
その上をいくやつらが集まる。

俺らはそれをSランクと呼んでいる。  
俺のほかにあと3人いてその人たちもやばいといわざる終えないほどすごい。

で実はそのSランクの人たちが集まるのが  
けいおん部なのだ。  
けいおん部としての活動もしているけどね。

そして今日はSランクとしての任務をする日だ。



辛い任務だが苦にはならない。  
だって今日はSランクの人たちと任務をする日だからだ。

楽しいしおもしろい。

龍「さて行くかな・・・」

そういつて俺は歩き出した。

天才（前書き）

テキストです。

## 天才

突然だが天才とは何か皆さんはわかるだろうか。  
ひとつ覚えてしまえばなんでもやっけてしまう人たちのことを  
さす言葉だろう。

だがこの言葉にふさわしい人物など  
過去や現在にいるのだろうか？  
過去現在「天才」と呼ばれる人たちは  
必ずしも「努力」を通ってきたに違いない。

イチローだって努力を続けてきた。  
なぜこの話を最初に言っているのかというと  
実はオレの目の前にはこの時代の天才と呼ぶにふさわしい人たちが  
4人もいる。

龍「さて今日のミッションの確認をしておきましょうかね」

？「……………」

今黙っていてちょっとぶてぶてしい顔しているこの人が

真田正志。（男）

さっき言った天才の中で1番の才能を持つ人と言っていていいだろう。

なぜならこの前130キロの球を（硬式）  
後ろ向きながら当たるすれすれのところを取った。  
目の前で見ていたけれど言葉で表せないくらいすごかった。  
でもいつも暴走気味なのがちょっとね。

？「で、今日はどこに行くんだ。」

今しゃべった少し髪が長い男のイケメンは  
伊達義彦。

清く正しくてかっこいい人だ。

こちらもすごい人でいつも冷静でどんな時でも  
1番いい判断ができる人だ。  
だけど発言するのが苦手なのかいつも  
何か提案するときの声が小さいのでなかなか伝わらない。

龍「今日はここから東に行ったところに  
廃ビルがあってそこで麻薬の密売が行われるように  
そこを取り押さえるようにと。」

正「そんなの警察に任せておけばいいじゃん。」

龍「何でも外国とかからいつぱい来ているようで  
平気で銃とか使って攻撃してくるから警察では取り押さえるのが  
難しいみたいです。」

正「……………」

このひとが黙っていると大体は怒っている。  
てかそれしか見たことない。

義「しっかしアイツは今日もおそいな。」

龍「そうですね……………」

実は今三人目の「天才」が来ていない。  
四人目はいまここにはいないからあとで紹介しよう。  
今予定時間より約30分たっている。

ミッションの時間は2時間前から潜入することになっているのだが  
遅い。もしかしたらこれで正志さんはいらついているかもしれない。  
早く来てくれー！。と心の中で叫んだその時、

？」「ごめーーーーん」

やっときた。

義「遅い！」

正「……………」

この人は上杉武文。

この人は非常に集中力があって

ミッション中は話かけたら切られそうなほどだ。

だけど今の通り時間にルーズなところがあって毎回困っている。

龍「では細かいところは歩きながら説明するので

軽く急ぎながら行きましょう。」

そうして俺たちは歩き出した。

歩きながら説明していく。

龍「麻薬密売で中心的に動いているのはロシアのマフィア。そして受け取るのは中国と韓国のマフィアです。」

義「何で日本のマフィアがないんだ？」

龍「ロシアのマフィアは国を追われていていろいろな国を転々としていて今は日本にいるそうです。」

正「なんでロシアの警察は動かないんだ？」

龍「実は国に追われている理由が大量虐殺でロシアのとある町の住人をほぼ全員でかい施設に密閉してサリンで殺したとか何とか。で、それからもさまざまな事件を起こしまくってロシア政府も国連もなかなか手の出さずらい組織にまでになってしまったんです。」

武「それなんで俺たちが処理しなきゃいけないの？なぜ中国と韓国のマフィアがつながってんの？」

龍「中国と韓国は知らないけど国連が動けないから当然日本政府も動けないので俺たちが動く羽目になったんですよ。」

と話していると目的の建物についた。

龍「いやー不気味ですねー。」

見た感じ普通に何か出そうな感じな建物だ。

このビルには自殺現場とかいろいろな噂がある。

正直このビルには入りたくない。

そう思っていると耳元からかわいい声が聞こえてくる。

？「応答お願いします。」

龍「こちらランクS。」

耳には小型のワイヤレスが仕込まれている。

かなり広範囲で使えるかなりいい代物だ。

そしてこの声の主は毛利夕実。

オレと同じ年で違うクラスだけど結構かわいい。

ミッションだとオペレーションがすごくうまくて

伝わりやすい。だけど毎回おどおどしてこまる。

そこがかわいいんだけど。

言い忘れたが伊達さん、真田さん、上杉さんはオレの1上だ。

だがしかし、なぜかオレがSランクのリーダーを務めている。

なんかまとめる力があるとか何とか。

先輩がいるのにリーダーとか正直気まずいところもある。結構大変だ。

タ「敵はビルの3階にいます。全員ばらばらに行動してください。」



正「お前は四人もオペレーションできるのか」

タ「え、えっと・・・やってみます。」

義「どんな作戦で行くんだ？」

タ「多分見張りとかが多いと思われませんが相手は追われる身ですからきつとある程度固まっていると思うので四人で場所を把握していきますながら」

三人は密売のマフィアのボスを捕らえる。1人は逃走ルートの確保でいきましょう。」

武「それって敵が追ってこない？しかもどうやってボスだけ捕らえるの？」

タ「しっかりボスの位置と確認して催涙弾を投げてボスは気絶させましょう。」

先輩方ならできるでしょう。追ってきたら日本警察が手を貸してくれて

何とかするとの話です。」

龍「で、肝心の役割は？」

タ「リーダーが決めてくださいよ。」

龍「・・・・。今回は伊達さんが逃走ルートの確認。」

真田さん、上杉さん、オレは別々にビルに入る。

伊達さんのルート確認後催涙弾を投入。そしてすばやく撤退し

その場にいる日本警察に身柄を渡して近くに神社に集合。

その時は夕実もきてくれ。」

夕「何かあるんですか？」

龍「ああ。少しな。」

龍「今回も全員生きて帰るように！」

四人「了解！」

その掛け声と共に俺たちはビルえと駆け出した。



## 戦闘（前書き）

考えているけれどこの話の終わりが無い。

## 戦闘

午後7時。

4時に学校を集合して6時にミッション開始なのだが  
予定より1時間遅く始まった。

上杉さんの遅刻がうまく時間調節してくれた。

おかげで中をゆっくり見れたのだが

このビルにはどこで麻薬の密輸が行われるかわからないほど  
部屋が多くある。

小さい部屋で行われたら見つけるのに大変だ。

そこでSランクだけが使える特別ワイヤレス盗聴器。

(このワイヤレス盗聴器は特別な音波で盗聴することができる。  
とにかくすごい)

これを各部屋に設置しておく。

大体これで相手の位置がわかる。

三つの国の言葉が話されるので1番いい手だ。

なんて話しているかはわからないけど。

夕実がいればなんとかなるだろう。

いまは密輸が行われそうなところを3人で別々に待機している。オレが3階にいて真田さんが5階、上杉さんが4階にいる。オレが3階にいる理由は中間だから。一番上は一番上は下から攻められたらやばいから。ヘリコプターで逃げてもいいけど国連が追っている組織だから上空からも攻撃されるだろう。

1番下は上から攻撃されればだめだからね。だから中間だと思っただけ。でもロシアのマフィアはバカだと思っ。密輸をビルでやらなければいいと思っ。船の上とかね。

ここで音のない通信が入る。  
タッチパネル式の通信機。そこには  
・ ターゲット補足。三階。1番右上。急行せよ。  
夕実からだ。相変わらず早いと思っ。敵が入ってから10分。音だけよくわかるものだ。

オレの予想は的中。オレは結構近くにいる。屋根裏を通り目的地に急ぐ。いつ密輸が終わるかわからない。移動中、3メートルくらいから光が漏れている。多分あそこなのだろう。

到着して中を確認。大柄な男が三人普通の男が三人だ。  
大柄の男がボスで他三人が通訳だろう。

オレは通信機で報告する。

・ 目的地の到着。ほか二人が来るまで待機。  
・ 時間が空くのでミッションの細かい説明などしようかな。

ミッションは星の数でミッションの難しさが決まる。  
たとえばこのミッションはSランク星2だ。  
Sランクは「Sランク」でひとくりされてるけど  
Aランク以下はAランクと星の数で組織されている。

なぜSランクは星が関係なく組織されているのかというと  
実はSランク星5を基準にして入団を決めているから。  
Aランク以下は人数多いんでね。いっぱい作らなきゃダメだからね。  
でもそれだけSランクは精鋭が集まる場所というわけです。

説明している間に集まったみたいだな。

あとは伊達さんを待つだけだな。

伊達さんはどんな場所でも冷静に動けるからこういう仕事は得意だ。  
まさに適材適所だね。

伊達さんを待っている間に細かい移動を確認しておく。  
夕実とも軽く打ち合わせをしておいた。  
下手したら俺たち全滅もありえる状況だ。慎重に行わなければいけない。

そして伊達さんから通信が入る。逃走ルートを個人で確認する。

小物入れから催涙ガスを取り出す。

これをオレが投げたら合図だ。息を整える。

3、2、1・・・。投げた。

敵がひるむ。その隙にオレが部屋に突入。真田さんと上杉さんが用意してあった

ワイヤーで部屋と部屋をつなげるドアを閉める。

敵がひるんでいる隙に軽くボスの三人のあごを殴って脳震盪を起し動きを封じ

真田さんと上杉さんに二人のボスを渡す。この間を五秒で済ます。オレが屋根裏にあがるうとすると

バキーン！

龍「っ！」

銃弾が右腕にあがる。敵が乱射してきた。

すぐに屋根裏に上がりミッションにすぐ戻る。

そのあとあごを殴り脳震盪を繰り返しビルから出る。



すぐに身柄を警察に渡してミッション終了。

龍「ふう……。」

義「今日も無事にできたな。」

武「そうだねー。」

正「お前はいつもあれくらい集中できたらいいのにな。」

ビルのほうから銃声が何度も聞こえる。

銃撃戦にでもなっているもだろうか。

でも警察に任せるといわれていたのだからいいだろう。

今日も無事でよかったと思いき空を見上げる。

そして同時に右腕に激痛が走っているのを思い出す。打たれたところだ。

龍「……。」

傷口をよく見てみる。貫通はしていない。

どうやら弾は腕の中に残っているようだ。

夕「みなさーん！」

夕実が走ってくる。

神社に集合忘れていた。

夕「だいじょうぶですか？みなさん。」

正「ああ。みんな死んではない。」

義「大丈夫だ。」

武「全員無傷だよ。」

龍「俺撃たれたんですけどね……。」

夕「どこですか!？」

龍「右腕。あとで行きつけの病院に行ってくるよ。」

武「そういえばなんか大事なこと言うんじゃないかなかったんだだけ。」

龍「たいしたことないですが、今年も夏休みあの行事があるので  
Aランク注目選手を考えて置いてください。」

正「あれか。メンドクサイな。おもしろいけど。」

龍「ちゃんと考えてくださいね。命に関わるから。」

正「おい。あそこにAランクの精鋭たちがいるぞ。あれはAランク  
星5だ。」

龍「別に無理して決める必要はありませんよ。今年もナシはきつい  
ですけどね。」

武「去年はいなかったからねー。入団者。今年はその中から入って  
ほしいなー。」

龍「だれかきましたよ。」

真「何でここにいるのお兄ちゃん。」

実はいつてなかったと思うが真由美と真田さんは兄弟なんだよね。並べてみると結構似ているなあ。

真田（妹）のに続いていつぱいついてきた。

この中からSランクにきてほしいなー。

あれはこの中に知人は真田（妹）だけだからよかった。と、思ったら香梨がいた。

香「あれ、龍二君なにしてるの？」

龍「え、えっと・・・」

返答に困る。

直球にミッションしてたとかいえないしどうごまかせばいいのやら。そしてさつきから右腕が温かい。血が予想以上に出ている。どうにかして早く病院にいかなければ。

？「はい、ちよつとどいてねー。」

そこへ救いの神が舞い降りた。

彼女は真田良子。真田さんのお母さんだ。じつはひと世代前のSランクのひとだ。結構若い。

良子さんは看護婦をやっていて救急車でここへきていた。結構銃撃戦になっていたが人が出ていないと思う。

オレ以外な。

良「けが人はいないようね。」

龍「良子さん！」

良「なに？龍二君。」

小さい声で話す。

龍「実はAランクのひとに見られちゃって助けてください！」

良「でも貴方怪我してないから救急車に乗せられないのよ」

龍「右腕……」

右腕を見せる。

良「これは結構重症ね。これくらいなら乗せてもいいかな。

じゃあ、歩いてきて。」

龍「真田さん。お先です。」

そういつてこの場を俺は逃れた。



戦闘（後書き）

かくのくるこい

未定（前書き）

前のヤツに詰め込みすぎたW  
そして高校受験の勉強辛い。

未定

昨日のミッションが終わりすぐにオレは病院にいった。  
あのあと真田さん達はどう対処したのだろう。  
申し訳なかったと思う。後で謝らなければ。

病院で診察したところなんと銃弾が骨を貫通してました。(笑い)  
まず腕の銃弾を取り除き、そうしてから1回止血する。  
そうしてから本当は腕に板をくっつけて包帯で巻き動かないようし  
ますが  
オレはそれを拒んだ。

メンドクサイのだ。包帯を巻くだけにした。  
メンドクサイなどの理由だけで医者言うことを聞かないやつはオ  
レだけだろう。  
そうしてオレは真田さん(母)にお礼をしてかえった。  
骨折だけですんでよかったと思う。家についたらすぐ寝た。  
もう寝たかった。

次の日



いつも道理おきて朝ごはんを作る。右手が使えないのは非常に不便だ。何とか朝ごはんを食べ早く家を出る。A星5のやつらに捕まりたくなかったからだ。

家を早く出たからかいつもより通学路には人が少ない。いつもなら一緒に学校に行く友達が二人いるのだが、その二人もA星5なので早く行った学校についたらメールをしよう。謝らなければ。

今日はいつものよりいい気分で起きたからか、気分がいい。オレは気づいたら小声である歌を歌っていた。

「祈りの歌を君にささげよう。

君も歌ってくれたらなおさらいい。

この時間が永遠に続いたらいいのにな。

いつまでもこの時間が。」

オレがけい音部で初めて作った歌のサビ部分だ。

正直ここ歌には思い出がある。

何も知らずSランクのメンバーになったオレはいきなりけい音部に入れられ

わからない先輩多くいる中作った曲だ。

この曲は真田さんたちのバンドを組んでオレがボーカルをしてなんとアマチュアの大会にこの曲で優勝した事もある。プロにも誘われたが断った。Sランクのことがあるからだ。他の誰にも言っていないがオレの自慢だ。そして思い出でもある。

そんな思い出の歌を気持ちよく歌いながら歩いていた時だ。後ろから声がかかる。

? 「おーい！」

? 「待ってくれ！」

後ろからものすごい勢いで二人の少年が走ってくる。

1人は青い髪で長めの髪型。

もう1人は茶色でこちらも長めの髪型。

青い髪形の方はの名前は青木青牙。

あおきせいかと読む。一緒に登校している友達の1人だ。スポーツ万能で顔もかっこいい。非常に明るいいいやつだ。だけど物事に鈍いところがある。それ以外は完璧だ。

茶色い髪型の方の名前は小田直生。

おだなおきと読む。いつしよに  
登校しているもう1人のほうだ。  
こっちは成績優秀でテストはいつも上位のほうにいる。  
ただ何でもふか読みする癖があり一度考えたら答えをとくまで何  
も気にしないところがある。

こんな二人といつも登校しているのだが今日はなんだか様子が変だ。  
オレが家を出るのだ早かっただけかもしれないけど。

龍「どうしたのそんなに急いで？」

オレは二人に言う。

青「どうしたもこうしたもないだろ。」

息を切らしながら青牙は言う。

小「昨日お前なんであのビルにいたんだ？しかも腕が血だらけで。」

やっぱりそのことか。

龍「昨日真田さんなんて言ってた？」

青「詳しいことは龍二から聞けつて。」

マジでか。あの人も無責任だな。おれが逃げたのが悪いんだけど。  
仕方ない適当なこと言って紛らわすか。

龍「んー。今のお前達にはいえないな。」

小「なんで？俺達A星5だけ。」

龍「だからだよ。だからいえない。」

青「意味がわからないよ。」

龍「A星5でとどまっているようじゃな。おれはお前達がA星5を超えるような実力を

つけたらオレから教えなくてもわかると思う。」

結構危なげな発言をいましたような気がした。

青「とくわからんけど、鍛錬を続ければいいんだな。」

小「お前がそういうのなら、多分そうなのだな。」

なんか納得したようだ。

俺の言葉はそんなに説得力があったのか。

龍「じゃ、いつもより早いけど学校に行こう。」

そういつて俺達はいつも道理の道で学校へと向かった。

いつもより早く教室についた割には  
教室はにぎわっていた。なんでだろうと一瞬考えてすぐに答えが出る。

ああ、A星5のやつらが集まっている。  
説明は青牙と直生に任せてさっさと逃げよう。

すぐに自分の席に荷物を置き教室を出ようとする。  
少し声をかけられても無視するぐらいの勢いで行くつもりだ。  
そして教室の戸に手をかけた瞬間。  
右腕の傷口のところをつかまれる。

龍「っ！！」

香「あ、ごめん。」

どうやら腕をつかんだのは香梨だったようだ。  
そしてその後ろに真田（妹）と青牙、直生もいる。

真「さて、昨日のことについて説明してもらったことにしましょうか。」

龍「さつき、青牙と直生に説明したんだけど。その二人から説明を聞いてもらいえるかな。」

数分後

青牙と青木の説明を聞いた香梨がオレに質問してきた。

香「なんで最高ランクまでいっているのになんでその上に言ったら教えるって言うんですか。」

「何で何かを隠すんですか？」

龍「隠さなきゃいけないことだからだよ。」

さらに真由美が口を挟んでくる。

真「そんなに大事なことなの？」

龍「うん。さらに危険だよ。ほら。」

右腕をみんなに見せる。

龍「A星5のミッションは誰も銃を使わないでしょ。俺達がやっていることは

銃を扱っているんだ。この右腕は銃で撃たれて骨まで砕けているんだ。

このことを深く知ってしまったって怪我人が出るのはいやなんだ。」

沈黙になる。

そして香梨が口を開く。

香「何で包帯だけなの？」

龍「これが1番オレにとってらくだから。証拠不足なら傷口を見せようか。」

真「論より証拠ね。見せなさい。」

オレは香梨と真由美を呼び教室の隅っこの方で包帯を解いて傷口を見せる。

香「うわ……………」

真「……………」

龍「引くなよ。」

傷口はまだ血おさまっていないくて穴が開いている。  
結構グロイ。

龍「これで満足か。これ以上知ってしまうとこれじゃすまなくなる。  
今知らなくていい話した。」

真「でも……………」

龍「心配してくれてんのか？」

真「その傷口を見れば少しは……………って心配してないわよ！」

見ているとおもしろい。

でも納得してないかもしれないので補足を入れておこう。

龍「大丈夫。もつと鍛錬すれば俺達の世界に来れる。

きたなら並大抵の鍛錬じゃすまないぞ。それを乗り越えたら自然に  
俺達の世界に来れる。まあ頑張れ。」

香「わかったわ。でもムリしないでね。」

真「そうだよ。死なないでね。」

香梨も真由美も本気で心配してくれているみたいだ。

龍「大丈夫死にはしないから。さあそろそろ授業が始まるから、青牙と直生は教室戻って。他は席につきな。」

青牙と直生は席に戻る。

そして真由美がそっと耳元でささやく。

真「何度も言うけど死なないでね。」

龍「ああ。」

そういつてオレは席に座るのだった。



## 説明（前書き）

今回は短めにしたい。  
あと勉強辛い。

## 説明

真由美たちの説明が終わり

何事もなく授業が進み昼休み。

今日は売店で買ったパンを片手に屋上へと向かっていた。

屋上の出入り口の上のところのさらに上のところ。

そこがいつもオレが昼飯を食べているところだ。

普通ははしごもなく上れないのだが、おれは普通ではないので上れる。

ここだと町全体を見渡せるこの学校で1番景色のいいところだ。

実はオレがここにきた理由は昼飯を食べるのと

もうひとつある。朝の出来事の時ふとある疑問を思った。その答えを考えにきたのだ。

なぜSランクを存在を隠さなければ行けないのか。

正式に特殊任務隊に登録されているのにその存在を隠さなければ行けないのか。

実はこの答えを見つけるにはオレのここへきた事情と

この学校の歴史と特殊任務隊の作られたり理由が必要になる。

分かっているのは俺がここに来た理由だけ。多分1番重要ではない情報だろう。

しかしこのひとつの情報だけでオレは重要な情報を割り出すことができた。

前に放課後に話すてきなことを言っていたのだがいえなかったのがここで

分かっていることだけを説明したい。

中三の受験シーズン。俺が住んでいるところは豪雪地帯で毎年積雪2メートルは当たり前のところだった。

学校帰り道、寒い中家に帰ったら勉強かー。いやだなー。と思いいながら歩いている。  
家について家のドアを空ける。

龍「ただいまー。」

時間は五時この季節なら十分暗いのに明かりがない。  
そしていつもなら誰かがお帰りと返すはずなのに返ってこない。

龍「？」

車はあるし変だな。と思い家に一歩上がる。  
そしてオレは何かに気がつく。

龍「これは血のにおい……。」

ちよっと鉄くさくてとく言うの嫌なにおい。

まさしく血のおいだった。  
ここでオレの脳はフル回転をする。家の状況はどうなっているのか  
分らない。  
ひとまずドアを開けないと始まらないと思いいりびングのドアをあけ  
て電気をつける。

龍「!?!」

まず俺の目身飛び込んだのは家族全員の血だらけの姿。  
かるうじて生き残ったペットはおびえている様子だった。  
何も考えられない時間が続く。  
ぞして我に返り、

龍「ひ、ひとまず救急車。」

救急車が来る間に自分ができることを探す。  
まずは脈の確認をした。まだ死んではいなかった。  
そして救急車が早く運べるようにとけが人を移動させておいた。

救急車が来る音がした。  
急いで病院へ搬送。俺も同行して病院で待つ。  
ここで気を紛らわすためか思い出したのかは思い出せないが  
父親のほうの実家に電話した。話しやすかったからだ。すぐに病院  
に来てもらい。

家族全員の無事を祈った。

だが、  
全員命は助からなかった。

オレ以外で家族は5人。  
父、母は時に優しく時には厳しくておせっかいなところもあるけれど  
オレがしたいことをなるべくさせてくれた。

姉はひとつ上でしっかりしていて頼りになり、  
オレのグチをよく聞いてもらっていた。最高の姉だ。  
弟は二人いて、1人が三つ下。もう1人は三歳になりたてのかわい  
い弟だ。

オレの最愛のかぞくが死んでしまった。  
悲しさを通り越して涙も出ずただ立ち尽くしていただけだった。

そしてお通夜の時俺はある学校に来ないかといわれた。  
それが希望が丘学校。そしてお通夜の日に細かいところまで説明さ  
れて

俺は入学とSランクへの入団を決めた。

なぜ俺がこんな早く決めたかというと、  
誘ってきた人のあるひと言だった。

「あなたの家族のが死んだ理由を知りたくありませんか？」  
その時俺が1番知りたかった。甘い誘惑だった。

そして俺はSランクに入団した数カ月後。

Sランクの資料からとあるものを見つけたのだ。

その資料の名前は

「〇〇市殺害事件。真相。」

おれの家族が死んだ事件の名前だった。

内容はそのままニュースに報じられたものとはほぼ同じだったが、  
ある部分だけ違っていた。殺され方だった。

ニュースは刃物で切られたと書いていたがここには  
何かで殴られたようなあとがあったと記されていた。

よく調べてみるとこれと同じ日時にミッションが行われていた。  
ミッションの出勤メンバーは歴代最強とされている  
Sランクメンバーが多く参加していた。しかも大人数で。  
しかしそのミッションは多くのことがかかれてはいなかった。

このことから俺がここにきた理由は、

俺の口止めではないかと俺は考えている。

あの時俺を殺し損ねたSランクメンバーはお通夜のおれを殺そうとしたが、

俺は多分家族の死でなんらかのリミッターがはずれ異常なまでにパワーアップしていた。

（よく何かしらのショックでリミッターが外れるのはこの世界ではよくあること。

龍二はそれが以上に高すぎた。）

そのことにきずいた、やつらは俺をSランクに入団させ、それと同時に

Sランクを引退し、この事件をなぞにしたと俺は考えてる。

もしかするとそのミッションは国家から命令されたミッションで俺の家族が国家秘密を知ってしまったためそれだと俺は考える。

この年にナゾの死を遂げる事件も少なくはなく、

しかもそれが全部Sランクの資料に載っていることが分かったため、俺はこの推理に核心を思っている。

多分他のナゾも日本国家が絡んでいるに違いないので、

正直調べられないことも多い。

だから俺はこれと関わるミッションがくるのを待っているためこの学校にいるのだ。

われながら変な人生である。

波乱である。でもすぐに友達ができたのでどうということはない。

真「龍ー！一緒にご飯食べよー！」

真由美から声がかかった。

他にも香梨がいる。

龍「いいよー！上ってきてー！」

このことを考えるのはあとにしよう。

ゆっくり考えよう。今は友達と過ごすことが一番いい。

真「なんか考え事？」

龍「まーねー。」

香「相談に乗るよ！」

龍「大丈夫だよ。たいしたことじゃないし。」

真「本当？」

龍「本当だって！」

香「分かった。変なこと考えていたんでしよう。」

龍「考えていないって！そんなこと考えるように見えるかおれ！」



真&香「見える。」

龍「えー！」

楽しい時間は過ぎていく。

## 説明（後書き）

真由美が真田（妹）から変わったことは気にしないで

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2919ba/>

---

青い空

2012年1月15日02時54分発行